

## 諸国安国寺考——成立時期をめぐって

### A study of the Ankokuji temples in the medieval Japan

松尾剛次  
MATSUO, Kenji

キーワード：安国寺, 利生塔, 豊後国

Keywords : Ankokuji, Rishouto, Bungonokuni

#### はじめに

室町幕府開創期の国家と仏教との関係を考えるさいに安国寺・利生塔は格好の素材である。なぜなら、それらは、室町幕府の意向を受け、勅願として当時の日本全国(66国2島)に設置されたからである。いわば、古代の国分寺・国分尼寺に匹敵する存在といえる。

私は、別稿<sup>(1)</sup>で、安国寺・利生塔政策について、総合的な分析を加えてみた。本稿では、それを踏まえつつ、安国寺の成立時期について考察する。個別事例としては、ことに豊後安国寺を取り上げる<sup>(2)</sup>。

豊後安国寺は太陽山安国寺と言い、現在の大大分県東国東郡国東町に所在する。その成立については、国東地方の豪族田原氏が、応永年中(1394-1428)に、足利義満の命を受けて絶海中津(1336-1405)を迎えて開山したと伝える<sup>(3)</sup>。

しかし、他の国のほとんどの安国寺は、従来、建武5(1338)年から貞和(1345-50)ごろに設定されたと考えられ、応永年間というのは、約50年ほども遅れている。はたして、応永年間に設定されたというのは正しいのであろうか。そういう理由から、本稿では、豊

後安国寺を個別に取り上げるのである。

#### 第1章 諸国安国寺の設立時期

諸国安国寺に関しては、利生塔とともに以下のようなことなどが明らかとなっている<sup>(4)</sup>。

- (1) 夢窓疎石の進言を受けて、足利尊氏も関与したが、直義が中心となり設置したこと。
- (2) 安国寺・利生塔の設置の目的は、(イ)元弘以来の戦争で死んだ人々の鎮魂(菩提を弔う)と戦災の悪因縁からのがれて天下太平を祈るを第一義とし、(ロ)南北朝動乱での論功行賞とともに、北朝勢力範囲(軍事的な拠点を確保)を拡張する、(ハ)領内の人心の安撫する、(ニ)各国守護と密接な寺を安国寺・利生塔と指定し、守護統制に利用する、ためであった。
- (3) 安国寺は、聖武天皇が天平13(741)年3月に詔を出して国ごとにおいた国分寺制度をモデルとし、他方の利生塔は、インドの阿育王が建立したという84,000塔をモデルとしたと考えられる。
- (4) 安国寺は、すべて五山派寺院が認定されたわけではなく、律宗寺院も少しあり、他方の利生塔は、禅宗寺院と、律宗寺院に多

く設置された。

(5) 安国寺は、新しく建てられたというよりも、旧来あった寺院に安国寺という寺号と所領を与えて設定された。五重塔ないし、三重塔である利生塔も、新造する場合もあれば、もともとあったものを利生塔とする場合もあった。

(6) 安国寺・利生塔は各々、1寺1塔ずつ66国2島に設置された。

(7) 安国寺・利生塔という通号は、康永4(1345)年2月6日の院宣によって定められた。それ以前は、「諸国寺塔」と呼ばれ、安国寺は「六十六ヶ寺」、利生塔は「六十六基」と呼ばれていた。

さて、本稿で注目したいのは、安国寺の成立時期である。この成立時期については、今枝愛真氏の研究がある。今枝氏は、「暦応3年頃から貞和3年ごろにわたって設置されたことがしられるが、おそらく利生塔と同様、建武5年頃から設置されはじめたのではなかろうか<sup>(5)</sup>」とする。すなわち、安国寺と利生塔と一括した政策として理解している。

たしかに、安国寺と利生塔とは、政策的に共通している。だが、一方の利生塔に関しては、建武5(1338)年以来、続々と指定されている<sup>(6)</sup>史料があるのに、他方、安国寺の場合には、「安国寺表」のように、暦応以後しか史料がない。それゆえ、成立(指定)の時期がずれていた可能性もありうる。そこで、成立時期に注目して、諸国安国寺を見直してみよう。

もっとも、安国寺の成立時期を論ずるうえで、注意すべきことがある。すなわち、先述の(7)のように、安国寺・利生塔という通号は、康永4(1345)年2月6日の院宣によって定

められ、それ以前は、「諸国寺塔」と呼ばれ、安国寺は「六十六ヶ寺」と呼称されていたのである。それゆえ、辞典類では、1345年2月に安国寺・利生塔が諸国に設置されたとする<sup>(7)</sup>。しかし、それは、安国寺・利生塔という通号の成立時期にすぎず、先述の(2)のような目的をもって、諸国に1寺・1塔を設定する政策は、それ以前から行われていたのである。それゆえ、ここでは、安国寺という通号以前の「六十六ヶ寺」に指定されたことをもって安国寺の成立とする。

安国寺指定の初見史料は次の豊前国天目寺の史料である。なお、天目寺は、現在の福岡県田川郡赤池町上野にあり、無隠元晦を開山とする<sup>(8)</sup>。

史料(1)<sup>(9)</sup>

豊前国天目寺<sup>元号泰平寺</sup>事、為六十六ヶ寺之随一、寄料所可令興隆也、可被存其旨之状如件  
暦応三年五月十日 <sup>(足利直義)</sup>左兵衛督(花押)  
当寺長老

史料(1)によれば、暦応3(1340)年5月10日付で、元は泰平寺と言っていた豊前天目寺に対し「六十六ヶ寺」の「随一」として、足利直義により寺領が寄付されたことがわかる。それゆえ、安国寺の成立は、暦応3(1340)年5月10日以前のことであったことがわかる。

史料(2)<sup>(10)</sup>

諸国利生塔安国寺事、建武以来御願異于他、且為勅願所被下通号也、仍差置警固可專興隆之由評議訖、肥後国安国託摩別当太郎相共致其沙汰、任雜掌申請之旨、止甲乙人妨、且全寺領之所務、且可注進造営之成否、将又有

遺乱之訴者、縦雖不遣奉書、毎度鎮狼藉、載起請詞、可令注申子細、寄事於左右、若有非法之儀者、可被処罪科之状、依仰執達如件

貞和二年九月廿日 (高師直) 武蔵守

合志能登守殿

史料(2)は、高師直が、貞和2(1345)年9月20日付で合志能登守に出した室町幕府御教書で、肥後国安国寺(寿勝寺)を警護し、興隆させることを命じている。史料(2)の傍線部から、利生塔と安国寺は、建武以来の御願であることがわかり、この史料から、安国寺と利生塔が建武以来設置されていたことがわかる。

利生塔は、建武5(1338)年5月17日付で久米田寺に建造を命じられた塔<sup>(11)</sup>が確認される最古である。建武5年は、5月には南朝の猛将北畠顕家が敗死し、7月には新田義貞も敗死した。また、8月には足利尊氏が征夷大將軍に任命される<sup>(12)</sup>など、足利方の基盤がほぼ固まった時期であった。そして、死者の鎮魂が問題となり始めたのであろう。それゆえ、確実な史料はないが、安国寺も建武5年以来、設定されようとしていたと推測する。すなわち、その面でも安国寺政策は、利生塔政策と一体であったと考えられる。以上の考察から、設定時期の下限が建武5年と想定したが、上限はいつであろうか。

史料(3)<sup>(13)</sup>

建武以来、建立諸国寺塔每国各一所事、去年二月六日院宣如此、所被下通号也、早改当寺本号、可為伊賀国安国寺之状如件

貞和二年六月六日 (足利直義) 左兵衛督(花押)

平等寺長老

史料(3)によれば、足利直義が、貞和2(1346)年6月6日付で、去年2月6日付の院宣により、安国寺という通号が決まったので、平等寺という名を改めて、伊賀安国寺とするように命じている。この史料などから、安国寺の通号が、康永4(1345)年2月6日の院宣により定まるとされてきた<sup>(14)</sup>。

この通号が決まったということは、やはり重要である。というのも、ほぼこの段階では、諸国寺・塔が全国に設定されていたからこそ、そうしたことがなされたと考えられるからである。とくに、安国寺の場合は、確認できる寺院のほとんど(表のように、68箇寺のうち、27箇寺)が、たとえば伊賀安国寺の例のように、寺を新しく建てるというより、旧来存在した寺院が安国寺と設定され、所領を与えられて保護された。それゆえ、康永4(1345)年2月6日段階で指定は済んでいたと考えられる。すなわち、下限は、康永4(1345)年2月6日と考える。

史料(4)<sup>(15)</sup>

爰元弘以来、天下大乱、不翅戰場兵卒多殞軀命、(中略) 神廟仏堂、朱門白屋、或為兵火所焚、或為賊徒所壊、(中略) 茲者、征夷大將軍源朝臣・左武衛將軍朝臣、真智内薫、靈機外発、自懷慚愧、欲謝王尤、(中略) 於扶桑國中、每州建立一寺一塔、普為元弘以来戦死傷亡一切魂儀、資薦覚路、(後略)

(訳)

ここに元弘以来、天下は大いに乱れた。ただ戰場で多くの兵卒が命を落とすだけではなく、神社仏閣も或いは兵火のために焼かれ、或いは賊徒のために破壊された。(中略) ここに、征夷大將軍源朝臣(足利尊氏)・左武衛將

軍源朝臣（直義）は、内に真智を薫らせ、外に靈機を発し、自ら慚愧の思いを抱き、罪過を謝せんとして、（中略）日本国中に国ごとに1寺1塔を建て、普く元弘以来の戦死傷亡した一切の御霊の成仏に資そうとしている。

史料(4)は、康永4（1345）年8月晦日の天竜寺供養にさいして、夢窓疎石が読み上げた挨拶文の一部である。それによれば、尊氏・直義らが、元弘以来の戦死傷亡した一切の御霊の成仏のために、諸国安国寺・利生塔を建立したことが述べられている。なお、夢窓は、安国寺・利生塔政策推進の中心人物である<sup>(16)</sup>。この史料からも、康永4（1345）年8月晦日以前には、安国寺の指定が終わっていたことがわかる。

さらに、注目されるのは、「安国寺表」の安芸と紀伊の安国寺の例である。安芸安国寺の場合は、『芸藩通志』に、「寺の縁起に、暦応二年毎国安国寺を置、当寺も其年初て建つ<sup>(17)</sup>」とある。紀伊安国寺の場合は、『紀伊続風土記』に、「安国寺は、暦応二年、足利直義、各州に令して、安国利民の為建る所の寺なり<sup>(18)</sup>」とある。いずれも江戸時代の史料で、縁起などに基づいており信頼度は低い、いずれも暦応2年に安国寺として初めて建てられたという説を伝えている。それが事実とすれば、安芸と紀伊の安国寺は、新造されたことになるが、はっきりしない。ただ、安芸と紀伊という国を異にする安国寺で、暦応2年に安国寺建立説があることを考えると、暦応2年は、安国寺史上の画期であった可能性がある。

確かに、暦応2年8月16日には、後醍醐が足利尊氏らを呪いつつ死去するという大事件<sup>(19)</sup>が起こっている。足利尊氏・直義らは、

後醍醐の怨霊を恐れ、その鎮魂のために同年10月には天竜寺を建造した<sup>(20)</sup>くらいで、元弘以来の戦争で死んだ人々の鎮魂と戦災の悪因縁からのがれて天下太平を祈ることを第一義とする安国寺・利生塔政策は、以前にもまして拍車がかかったと考えられるからである。

以上、安国寺は、建武5年から康永4年2月以前に設定され、とくに暦応2年が画期であったことを述べた。

## 第2章 豊後安国寺について

ところで、豊後安国寺の成立については、先述したように国東地方の豪族田原氏能が、応永年中（1394-1428）に、足利義満の命を受けて絶海中津（1336-1405）を迎えて開山としたと伝えられている。

しかし、前章で論じたように、他の国の安国寺は、建武5年から康永4年2月以前に設定されており、応永年間というのは、約50年余も遅れている。はたして、応永年間に設定されたというのは正しいのであろうか。

この点については、すでに先学も気づいており、『大分県史 中世編二<sup>(21)</sup>』では、次のように考えている。

『太宰管内志 下<sup>(22)</sup>』では、安国寺の設定がほとんど不要になったと考えられる時期、すなわち応永年中に開かれたとするが、九州の他の安国寺設定の時期より約50年ほど遅れている。それゆえ、応永というのは中興の時期であって、田原貞広が飯塚城（東国東郡国東町）を築いて東国東に入った観応2（1351）年に設立されたと考えられる。観応2年に安国寺となった例として長門安国寺東隆寺がある。すなわち、応永年間は、中興の時期であって、安国寺の設定の時期は、西国

東の武士田原貞広が東国東を根拠地とした観応2年のことである。

この説こそ、現在の通説と評価できる。たしかに、応永年中の創建というのは時期はずれであるし、『太宰管内志 下』は、江戸時代(1750)に刊行された「豊鐘善鳴録<sup>(23)</sup>」(いわば大分県の高僧伝)に基づいており、そのみをもって応永年中に開創されたとは言い難い。たしかに、応永年中というのは、中興の時期であろう。

しかし、その説にも大きな問題がある。まず、田原貞広は、北朝方で、妻が、泉福禅寺を創建したり、子供が禅僧になるなど、貞広が禅宗に理解を示していたことが傍証とされているが、それらは貞広が安国寺を創設したことを示してはいない。また、観応2年説の傍証として、観応2年に安国寺となったとされる長門安国寺東隆寺の例があげられている。しかし、それも、論拠足り得ない。

長門安国寺東隆寺が観応2年に安国寺として設定された根拠は、江戸時代の「寺社由来<sup>(24)</sup>」である。

#### 史料(5)<sup>(25)</sup>

当寺之儀は厚東武実公之御代、暦応二年二御建立二而、号鳳凰山東隆禅寺と、則仏心恵灯南嶺子越大禅师を請待二而為開山、其後観応二年詔を以列諸山、賜安国東隆禅寺之勅額を以、於知行分は山並一郷被附置大寺之由申伝候

これによれば、東隆寺は暦応2年に厚東武実によって南嶺子越を開山として建立され、観応2年に諸山となり、安国東隆禅寺の勅額を賜ったことがわかる。だが、この史料は、

観応2年に諸山に列せられ、「安国東隆禅寺」という勅額が授けられたことを意味しているのであって、観応2年に安国寺となったことを示しているのではない。そもそも、先述のように暦応2年段階では、「安国寺」という通号はなかった。前章での考察結果を考え合わせると、厚東武実は、「六十六寺之随一」の寺として、東隆寺を禅寺として建立したと考えられる。以上のように、長門安国東隆寺は、観応2年というより、暦応2年に安国寺(正確には「六十六寺」の1つ)となったと推測される。

さらに、西国東の田原貞広が観応2年に東国東に入ったからといって、その年に安国寺が設定されたという史料的裏付けにはならないのである。

以上から、観応2年説も、根拠がはっきりしないということになる。それでは、豊後安国寺の設立時期は、従来言われてきたように、応永年間なのであろうか。

勿論、私も、応永年間というのは、中興の時期だと考えている。というのも、前章で論じたように、そもそも、諸国安国寺は、諸国利生塔とともに、足利尊氏・直義兄弟によって、元弘以来の戦死傷亡した一切の御霊の成仏に資そうとして、建武5年から康永4年8月以前に設定されたと考えられるからである。

とすれば、康永4年以前の段階で、豊後安国寺も設定されていたと考えたいが、そう考えると次の史料は注目される。

#### 史料(6)<sup>(26)</sup>

国崎郡太陽山安国禅寺者云々、暦応二年己卯勅六々州、各建安国寺是其一也

これは、『太宰管内志 下<sup>(27)</sup>』「豊後安国寺」に引用された安国寺釈迦堂の棟札銘で、享保6(1721)年に記された。それによれば、豊後安国寺は暦応2(1339)年に「六十六寺」の一つとして建立されたと記されている。それは、江戸時代の伝承であるが、そうした伝承も、失われた史料に基づいていたかもしれない。先述したように、この暦応2年は安国寺政策における画期であったと考えられる。それゆえ、豊後安国寺が「六十六寺」の一つとして設定(新造されたのか、旧来の寺を指定したのか不明であるが)されたのは暦応2年であったと推測する。

## おわりに

以上、諸国安国寺の成立時期に注目しながら、(1)諸国安国寺は、建武5年から康永4年2月以前に設定され、とくに暦応2年が画期であったこと、(2)豊後安国寺も暦応2年に「六十六寺」の一つとして設定(新造されたのか、旧来の寺を指定したのか不明であるが)されたと推測されること、などを論じた。

豊後安国寺(長門安国寺も)が、後醍醐天皇の死去した暦応2年に設定されたとすると、安国寺政策における暦応2年の画期性がますます明らかとなったといえる。そもそも、安国寺・利生塔は、元弘以来の戦争で死んだ人々の鎮魂と戦災の悪因縁からのがれて天下太平を祈ることを第一義とし創設されたのであるが、足利尊氏・直義らが、もっとも、怨霊になるのを恐れたのは後醍醐天皇であったのであり、暦応2年に多くの国で、安国寺・利生塔の設定がなされたのであろう。

## 註

- (1) 拙稿「安国寺・利生塔再考」(『山形大学紀要(人文科学)』14-3、2000)。諸国安国寺(利生塔)については、辻善之助「安国寺利生塔考」(辻『日本仏教史研究 第二巻』岩波書店、1983。オリジナルの論文は明治37(1904)年に脱稿)、今枝愛真「安国寺・利生塔の成立」(今枝『中世禅宗史の研究』東京大学出版会、1978(改訂版))を参照されたい。また、玉懸博之『日本中世思想史研究』(ぺりかん社、1998)所収「夢窓疎石と初期室町政権」も参考になる。
- (2) 豊後安国寺の研究として、『大分県史 中世編二』(大分県、1985、421-423頁)などがある。
- (3) 『大分県の地名』(平凡社、1995)361頁。
- (4) 拙稿「安国寺・利生塔再考」(前註(1))参照。
- (5) 今枝『中世禅宗史の研究』(前註(1))109頁。
- (6) 今枝『中世禅宗史の研究』(前註(1))86頁。
- (7) 例えば、『日本史辞典』(角川書店、1974)の「年表」参照。
- (8) 今枝『中世禅宗史の研究』(前註(1))125頁。
- (9) 『南北朝遺文 九州編二』、1513号文書。
- (10) 『南北朝遺文 九州編二』、2243号文書。
- (11) 『岸和田市史史料 第一輯 泉州久米田寺文書』(岸和田市、1973)57号文書。
- (12) この間の南北朝動乱については、佐藤進一『南北朝の動乱』(中央公論社、1965)や拙著『太平記』(中央公論新社、2001)など参照。
- (13) 『三国地志』103、「伊賀国旧案」。
- (14) 今枝『中世禅宗史の研究』(前註(1))82頁。
- (15) 『夢窓国師語録 下』「天竜寺仏殿慶讚陞座法語」。
- (16) 拙著『太平記』(前註(2))70・71頁。
- (17) 『芸藩通志』39。
- (18) 『紀伊統風土記』31。
- (19) この間のことは、拙著『太平記』(前註(2))22-24頁参照。
- (20) 拙著『太平記』(前註(2))70頁参照。
- (21) 『大分県史 中世編二』(前註(2))。
- (22) 『復刻 太宰管内志 下』(防長出版社、1978)239頁。
- (23) 『豊鐘善鳴録』(直入史談会、1934)。
- (24) 『山口県の地名』(平凡社、1980)409頁。

「寺社由来」は「防長寺社由来」の事で、萩藩が編纂し、享保年間以降に成立した記録である。防長両国の萩藩領を初め、岩国・徳山・長附・清末各支藩領諸村の各寺社の上申記録である（『山口県の地名』690頁）。

- 25) 『山口県の地名』〈前註24〉409頁。
- 26) 『復刻 太宰管内志 下』〈前註22〉239頁。
- 27) 『復刻 太宰管内志 下』〈前註22〉。

## 付記

豊後安国寺の調査にさいして、住職の後藤康道様に大いにお世話になりました。記して感謝の意を表します。

## 安国寺表

	国名	寺名（元の名）	安国寺指定時期	典 拠
1	山城	安国（北禅）寺	暦応4（1341）年8月23日以前	『東福寺誌』
2	大和	安国寺	?	『招提千歳伝記』
3	河内	安国（正覚）寺	?	『蔗軒日録』文明16年12月25日他
4	和泉	安国寺	?	『教王護国寺文書』5
5	摂津	安国（光雲）寺	?	『扶桑五山記』2
6	伊賀	安国（平等）寺	貞和2（1346）年6月6日（貞和1年2月6日の院宣により安国寺と改称）以前	『三国地志』103
7	伊勢	安国（神贊）寺	?	『扶桑五山記』2
8	志摩	安国寺	?	『志陽略記』
9	尾張	安国寺	?	『西大寺末寺帳』（拙著『勧進と破戒の中世史』所収）
10	三河	安国寺	?	『三河国郡村誌』
11	遠江	安国（貞永）寺	?	『扶桑五山記』2
12	駿河	安国（承元）寺	?	『扶桑五山記』2
13	伊豆	安国寺	?	
14	甲斐	安国（心経）寺	?	『安国寺由緒書』
15	相模	安国寺	?	『明月院古図』
16	武蔵	安国寺	?	
17	安房	安国寺	?	『大日本国誌』3
18	上総	安国寺	?	『檀林誌』4
19	下総	安国寺	?	『空華集』19
20	常陸	安国寺	?	『新編常陸国誌』
21	近江	安国（天寧金剛）寺	?	『扶桑五山記』2
22	美濃	安国寺	?	『扶桑五山記』2
23	飛騨	安国（少林）寺	?	『扶桑五山記』2
24	信濃	安国寺	?	『扶桑五山記』2
25	上野	安国寺	?	『高崎市史』下
26	下野	安国（薬師）寺	?	『下野国誌』6
27	陸奥	安国（興聖）寺	?	『宮城県地名』
28	出羽	安国寺	?	『太平山安国寺誌』、『群馬県史資料編五中世1』854・855頁
29	若狭	安国（高成）寺	?	『高城寺文書』

	国名	寺名（元の名）	安国寺指定時期	典 拠
30	越前	安国（長樂）寺	？	『扶桑五山記』 2
31	越中	安国寺	？	『越雪集』
32	越後	安国寺	？	『越後頸城郡誌稿』 25
33	能登	安国寺	？	『扶桑五山記』 2
34	加賀	安国（崇聖）寺	？	『慧日山東福寺末寺簿』
35	佐渡	安国寺	？	『佐渡国寺社境内案内帳』
36	丹波	安国（光福）寺	貞和 2（1346）年12月28日以前	『安国寺文書』
37	丹後	安国寺	？	『扶桑五山記』 2
38	但馬	安国寺	？	『扶桑五山記』 2
39	因幡	安国寺	？	『扶桑五山記』 2
40	伯耆	安国（禪永）寺	？	『伯耆志』
41	出雲	安国（円通）寺	康永 4（1345）年 4月 9日以前	『安国寺文書』
42	石見	安国（福園）寺	？	『扶桑五山記』 2
43	隠岐	安国寺	？	『隠州視聽記』 4
44	播磨	安国寺	？	『扶桑五山記』 2
45	美作	安国寺	？	『作陽誌』
46	備前	安国寺	？	『吉備温故』 28
47	備中	安国寺	？	安仁神社所蔵の鐘銘
48	備後	安国寺	？	『福山志料』
49	安芸	安国寺	暦応 2（1339）年	『芸藩通志』 39
50	周防	安国寺	？	『延宝伝灯録』 16
51	長門	安国（東隆）寺	暦応 2（1339）年？	本文参照
52	紀伊	安国寺	暦応 2（1339）年	『紀伊続風土記』 31
53	淡路	安国（福厳）寺	？	『慧日山東福寺末寺簿』
54	伊予	安国寺	？	『扶桑五山記』 2、『安国寺文書』
55	讃岐	安国寺	？	
56	阿波	安国（補陀）寺	暦応 3（1340）年か	『夢窓国師語録』 下1 「阿波志」
57	土佐	安国寺	？	
58	筑前	安国（景福）寺	暦応 4（1341）年 5月 29日以前	『肥後相良文書』（『南北朝遺文 2』 1671号文書）
59	筑後	安国寺	？	『和漢五山志』
60	豊前	安国（天目）寺	暦応 3（1340）年 5月 10日以前	『豊前興国寺文書』（『南北朝遺文 2』 1513号文書）
61	豊後	安国寺	暦応 2年？	『太宰管内志下』
62	肥前	安国（大光）寺	？	『扶桑五山記』 2
63	肥後	安国（寿勝）寺	康永 1（1342）年 7月 7日以前	『肥後寿勝寺誌』（『南北朝遺文 2』 1806号文書）
64	日向	安国寺	？	『扶桑五山記』 2
65	大隅	安国寺	？	『薩藩名勝志』 13
66	薩摩	安国寺	？	『扶桑五山記』 2
67	壱岐	安国（海印）寺	？	『扶桑五山記』 2
68	対馬	安国寺	？	『扶桑五山記』 2